

SlackBot プログラム仕様書

2018/4/26

吉田 修太郎

1 概要

2 対象とする利用者

本プログラムは、以下のアカウントを所持する利用者を対象としている。

- (1) Slack アカウント
- (2) Heroku アカウント
- (3) GitHub アカウント

GitHub アカウントは、本プログラムによって issue の追加する機能や issue を一覧にして返信する機能を利用する場合に必要となる。

3 機能

本プログラムは、Slack での “@SYBot” から始まる発言に対して、その発言の “@SYBot” 以降の内容に応じて返信する。本プログラムが持つ機能について、以下に述べる。

- (1) 任意の文字列を返信する機能
ユーザが “@SYBot 「(任意の文字列)」と言って” と発言した場合、その発言の内の (任意の文字列) の部分を返信する。たとえば、ユーザの “@SYBot 「はじめまして」と言って” という発言には、“はじめまして” と返信する。
- (2) 設定された GitHub リポジトリの issue を一覧にして返信する機能
ユーザが “@SYBot get issue” と発言した場合、設定された GitHub リポジトリの open 状態の issue を取得し、取得した issue 全てのタイトルを返信する。
- (3) 設定された GitHub リポジトリに issue を追加する機能
ユーザが “@SYBot make issue t:(title)b:(body)” と発言した場合、設定された GitHub リポジトリに新たな issue を追加する。発言中の (title) と (body) は任意の文字列である。また、(title) は作成する issue のタイトルとなり、(body) は作成する issue の本文となる。(title) さらに、issue の追加が正常に行われた場合は “created” を返信し、追加に失敗した場合は “creation fail:(message)” を返信する。返信中の (message) は、GitHub の API から送信される message の内容である。

4 動作環境

本プログラムは Heroku 上で動作する。Heroku とは、ソフトウェアを構築し、稼働させるためのプラットフォームである。Heroku の動作環境を表 1 に示す。

表 1 Heroku の動作環境

OS	Debian 8.1
CPU	Intel(R) Core(TM) i5-4590
メモリ	1.0GB
Ruby	ruby 2.1.5p273
Ruby Gem	bundler 1.16.1 mustermann 1.0.2 rack 2.0.4 rack-protection 2.0.1 tilt 2.0.8 sinatra 2.0.1

5 環境構築

5.1 概要

本章では、本プログラムの動作のために、環境構築を行う。環境構築のために設定が必要な項目を以下に示す。

- (1) Heroku の設定
- (2) Slack の着信 Web フックの設定
- (3) Slack の発信 Web フックの設定
- (4) GitHub の API の認証設定

上記の各項目について、次節で項を設け説明する。

5.2 手順

5.2.1 Heroku の設定

- (1) Heroku アカウントの作成
- (2) パッケージのダウンロード
- (3) アプリケーションの作成

5.2.2 Slack の着信 Web フックの設定

- (1)
- (2)
- (3)

5.2.3 Slack の発信 Web フックの設定

- (1)
- (2)
- (3)

5.2.4 Heroku の環境変数の設定

Heroku の環境変数を設定する．以下のコマンドを実行する．

```
$ heroku config:set INCOMING_WEBHOOK_URL="<incoming_webhook_url>"  
$ heroku config:set USERNAME=<username>  
$ heroku config:set PASSWORD=<password>
```

実行後，着信 Web フックの URL，GitHub の Username，および GitHub の Password が環境変数として設定される．

6 使用方法

本プログラムは，Heroku にデプロイして使用する．本プログラムを Heroku で管理しているディレクトリで，以下のコマンドを実行する．

```
$ git push heroku master
```

実行後，本プログラムが Heroku にデプロイされ，本プログラムの機能が利用可能となる．

7 エラー処理と保証しない動作

参考文献

- [1] 乃村研究室 資料 <https://github.com/nomlab/BootCamp/blob/master/2018/README.org>